

夕星<sup>ゆうせい</sup>は以前にも天に向けて、願ったことがあった――

たしか、あれは小学生の頃だ。

夕暮れ時の教室で、一枚のメッセージカードと睨み合っていたことを覚えている。

「むむむ、」

短冊を模したメッセージカードの裏には「スターレター・プロジェクト」と、幾つかの企業名が綴られていた。

どうやら、ここに羅列された企業たちが人工衛星を開発しているらしく、そこへ全国の少年少女から募集した「願いごと」を乗せて、宇宙へと打ち上げるそうだ。

大仰なプロジェクト名に対して内容は呆気ないほどシンプルで。今の夕星ならば、それが企業たちのプロモーション戦略であったことも理解できる。

けれど、当時の自分はまだ十歳になったばかりの子供だったのだ。「お星様に願いが届けば――」なんて謳い文句を本気で信じていたのだろう。

だからこそ、幼い夕星がメッセージカードに向き合う態度も、また真剣であった。

プロのスポーツ選手にもなりたいし。ゲームの世界大会で優勝もしてみたい。

ベルトを巻いてヒーローにだって変身してみたいし、ドラゴンと友達になるのも悪くない。

そうやって頭に浮かんだ空想や「願いごと」を書いては消してを繰り返しているちに、いつの間にか放課後になっていたと言うわけだ。

何度も書き直したメッセージカードはすでによれきっていた。きっと、これ以上の書き直しもできないだろう。

「いい加減、決めないとなあー」とぼやきながら、瞳を伏せた。

そして、やはりこれしかないであろう、と2B鉛筆を走らせる。

『カッコよくて大きなロボットに乗ってみたい』

夕星は自らが選んだ「願いごと」に満足し、席を立った。

あとはこのメッセージカードを職員室で待つ担任に渡すだけだ。足早に教室を去ろうとした、すぐそこで――



どうして、今になってそのことを思い出すのであろうか？

「たしか……俺は、あの時にヒバチの奴と……」

夕星の意識は次第に明瞭になってゆく。頭には泥を詰めたような倦怠感こそあれど、目を開けられないほどじゃない。

ゆっくりと上体を起こしながらに、辺りの様子を伺った。

ここは清潔感のあるベッドの上。ぴしゃりとカーテンが閉ざされた窓に、ツンとした匂いを放つ薬品棚。

そして向かいには、自分に対し背を向ける女性の姿があった。

愛用の拡声器を手にした彼女はきつと、養護教諭の未那月美紀みなつきみきに違えない。

ならばここは学校の保健室であろうか？

「えっと……」

夕星は頭の中で一つずつ起こった出来事を整理して、そして自ずと一つの答えを導き出した。砂塵と化した〈エクステンド〉が復活してから、謎の魔女に十悟じゅうごが胸を貫かれてしまうまで。

——その全てが悪い夢であったと。

きつと自分は放課後になる直前で、貧血か何かで倒れてしまったのだ。

そんなコンディションだったのだから、次から次へと展開が移り変わる奇妙な悪夢を見てしまったのだろう。

「そうだよな。怪獣が喋ったり、俺が〈エクステンド〉に乗れるわけもないからな」

夕星は拳を強く握り締め、今が現実であると確信を得た。

「はは！ まして、あの十悟が死ぬなんて、」

そして、無理にでも笑うことで脳裏に焼きついてしまった光景と、指先に残る血液の温もりを忘れようと努めた。

「かむろ神室くん、残念ながら君が体験した一部始終は紛れもない現実だ」

だが、彼女はそれを許さない。

「えっ……」

「血の付いた学生服はこちらで処分させてもらったが、そうだな……額に指を当ててみたまえ」  
恐る恐る指先を伸ばせば、ジクリとした痛みに当たった。

「その傷は、あの怪獣が現れたときに君が負った傷のはずだ」

「なっ……なんで!？」

「もう一度教えようか？ 君が体験したことは全て事実で、夢や幻でもない。その証拠に君の身体にはダメージが残っているし、エゴシエーター能力の酷使で体力を使い果たしたからこそ一時的な昏睡状態にも陥ったというわけだ」

「エゴシエーター」——— とも飛び出してきたその単語に夕星は思いつきり眉を顰めた。

「アンタ……本物の未那月先生か？ あの人は確かに変人だが、それでも、一教師の範疇にと

どまる程度の変人な筈だ」

「ほほう？」

少しずつ警戒心が強まっていく夕星に対し、未那月先生は余裕のある態度を崩そうとしない。「神室くん、どうやら君は三つの大きな誤解をしているらしい。だから、その誤解を一つずつ、丁寧に紐解いていこうじゃないか！」

「まず一つ」と、彼女は閉ざされたカーテンを掴んでみせた。

「君はここを学校の保健室と思っているようだが、それは不正解だ。よく思い出しても見たまえ、若干室内のレイアウトが私の保健室とは異なっているだろう」

彼女がカーテンを開けば、眩い陽光と共に外の景色が飛び込んできた。

「なっ……!?!」

窓の外にあったのは澄み渡る一面の青空と、巨大な雲の群れだ。

逆に言えば、それ以外が何もない。けれども、そんな退屈な景色が少しずつに前方から後方へと流れてゆく。

「ここは高度一〇〇〇〇メートル。上空に浮かぶ反重力飛行艇（ペンシル&ノートブック号）の医務室さ」

「飛行艇だ?!」

「なんなら、あとで艇内を見て回るといい。食堂に売店と設備も充実しているし、反重力エンジンや整備ハンガーなんかも男の子にとっては、ロマンを感じられるものに違いないだろうからね」

未那月先生の発言は、そのどれもが絶妙にズレていた。空気が読めているとも言いがたい。

その証拠に夕星の神経は、先ほどから逆撫でされっぱなしなのだから。

「おい、アンタッ！ 人をおちよくるのも大概にしろよな、だいたい俺が聞きたいのはここがどこかじゃない。空の上だろうが、海の底だろうが、んなことはどうだっていいんだ！」

「ほう、ならば何を聞きたいのかな？」

「全部に決まってるだろ！ ただ、今はとりあえず、アンタがどうして未那月先生に化けてるかを教えやがれ！」

「ふむ……どうやら神室くんは、私のことを養護教諭・未那月美紀に化けた偽物か何かだと考えているらしいが、それこそが二つ目の誤解なんだよ」

彼女は偽物でも本物でもない。ただ、強いていうなら「偽装を解いた」というべきか。

「私にとっては養護教諭の方が仮の姿なんだよ。調査をスムーズに進めるためには、私自身が、全国の高校を一定周期で転々とする必要があったからね」

彼女はこちらへと向き直ると、羽織っていた白衣を脱ぎ捨ててみせた。

露わとなる、紺のスーツ姿はスレンダーな彼女によく似合う。そして胸元に止められたネク

タイピンには「ARRAMS」と綴られていた。

「そう言えば、お客人に対して自己紹介と歓迎の挨拶をしていなかったね。では改めて。私は

未那月刀剣術の師範代にして、秘密結社ARAMsの設立者、未那月美紀だ。——そして、  
ようこそ我々の組織へ」